

博士論文の審査結果の要旨

専攻	保健医療学専攻	分野	先進的ケア・ネットワーク 開発研究分野
学籍番号		院生氏名	木村 暢男
通学キャンパス			
論文題目	認知症在宅生活支援におけるケアマネジャーの困難感の分析		
審査結果(枠で囲む)	合格		不合格
<p><審査結果の要旨></p> <p>本研究の目的は、認知症のある利用者に対する在宅生活支援におけるケアマネジャーの困難感を、定量的かつ構造的なモデルを作成することのより“見える化”することである。</p> <p>本研究の意義は、(1)25名のケアマネジャーに対する半構造化面接と全国各地のケアマネジャーに対する大規模調査を実施しケアマネジャーの困難感に関する「代表性の高いデータ」を集めたこと、(2)ケアマネジャーの困難感という主観的な事象を、K-J法と因子分析を用いて、「定量的かつ構造化した形でケアマネジャーの困難感を表すモデル」を作成したことである。</p> <p>方法は、25名のケアマネジャーに対する1対1の半構造化面接と2,102名のケアマネジャーに対する質問紙調査を行った。まず、半構造化面接によって得られた内容をKJ法を用いてカテゴリー分類を行い、ケアマネジャーの困難感を5のコアカテゴリー、10のカテゴリー、62のサブカテゴリーに分類・整理した。その62のサブカテゴリーを質問項目として質問紙を作成し、郵送による留置き式の自記式質問紙調査を行った結果、全国各地の907名のケアマネジャーから回答が得られた。回答されたデータを因子分析した。2つの調査デザインは適切であり、かつ倫理的な配慮も行われている。</p> <p>その結果、ケアマネジャーの困難感を表す62のサブカテゴリーから13因子が抽出された。13因子の内訳は、周辺症状に伴う困難感が4因子、医療機関との連携に伴う困難感が5因子、その他4因子であった。この結果をもとに、「定量的かつ構造化した形でケアマネジャーの困難感を表すモデル」を作成した。この図から、周辺症状の軽減、医療機関との連携、そして、家族支援を促進することがケアマネジャーの困難感の軽減に有効であることが示唆される結果となった。</p> <p>これまでもケアマネジャーの困難感に関する研究は行われているが、各因子の関係を整理して構造化した物はなく、この研究の新規性は、全国各地から収集した代表性の高いデータを用いて、ケアマネジャーの困難感を定量的かつ構造化した形で表現したことである。今後のケアマネジメント手法の発展に貢献する研究として高く評価できる。</p> <p>7月27日、8月24日の2回の審査会を開催し、初回審査で論文の論理の立て方や論文内での表現方法の修正を求めたところ、適切に修正された。また、口頭試問において適切に応答した。以上の結果から、審査会の審査員全員は本論文が著者に博士(介護福祉・ケアマネジメント学)の学位を授与するに十分な価値があるものと認めた。</p>			
論文審査担当者	<p>主査 高橋 泰</p> <p>副査 松永 千恵子</p> <p>副査 井上 善行</p>		